



道路沿いの擁壁の苔を柔らかな素材で削り、楽しい絵を出現させた「苔物語」は、じもとの人やこの地を訪れた人の目を楽しませています。井上さんの雑貨は、伊方町内の道の駅などで販売中。「みんなの憩いの場に」と長岡夫妻が整備している庭は、撮影時は冬で花が少ないが、これからが楽しみな場所です。

じもと民が応援

大江地区在住
長岡伝之さん、多賀子さん



長岡さん自身、高校卒業後2年間は大阪で働いていたUターン者。現在は自家用野菜やハーブの栽培などをしながら庭づくりなどの趣味を楽しんでいます。長岡さんは、自宅の庭に、地元の方や外から来られた方、Uターンされた方たちが気軽に集うことができる庵を自作しました。「Uターンの支援は制度も必要ですが、じもとにけこみややすい雰囲気づくりが大切。人がつくるセーフティネットであたかかく迎えたい」と話します。

魅力あるイベントの数々

2017年4月に佐田岬灯台が初点灯から100年目を迎えることから、それを記念して5月に「佐田岬灯台点灯100年祭」が大々的に開催されます。夏には花火大会、魚のつかみ取りなど趣

向を凝らしたイベントが行われるほか、秋祭りでの五ツ鹿や牛鬼、唐獅子、伝統行事のしゃんしゃん踊りなど、季節毎に異なった町の良さが感じられます。

「八幡浜の高校を卒業して、すぐに伊方町に就職したのですが、『将来のやりたいことに役立つ仕事をしよう』と県外へ。数年間、福岡県で働きました」という井上さん。伊方町に腰を落ち着けたのは10年前。「夢だった雑貨づくりを仕事にしよう」と決めたんです。じもとなら魚は父が釣ってくる、野菜は自家栽培。イノシシの肉は猟師さんからもらえるから、食費もそれほどかからない。生活費を抑えることができ、暮らしに不安をもつことなく、好きにチャレンジしようと思つています。食や人に恵まれたじもとだから、彼女はまっすぐに夢を追いかけることができるのかも知れません。

家賃や食費などの心配がないじもと暮らし。
湧き上がる自分の夢を
真っ直ぐに追いかけられます。

02
灯台じもと
暮らしの人々
雑貨作家
井上葉月さん
(34歳)

